

論 文

小学校の修学旅行版「おこづかいちょう」を用いた金融経済教育

A Practice of Financial Education for School Excursion at Primary School

兵庫教育大学連合大学院(院生) 小井戸 あや乃 Ayano Koido
岐阜大学 大藪 千穂 Chiho Oyabu

キーワード

小学校, 修学旅行, 家庭科, 授業実践, 金融教育

要 旨

我々は小学生用に開発した「おこづかいちょう」を用いて小学 6 年生を対象に 11 ヶ月間の継続記入内容の分析を研究している。本論文では、継続記入期間中に修学旅行用の「おこづかいちょう」を作成し、それを用いた 4 時間の授業案を開発・実践し、児童がどのように修学旅行でのお金の使い方を考え、使用したかを分析した。また継続記入している児童を、「おうちの人からの一言」の頻度によってグループ分類し、グループによって、修学旅行というイベントでのお金の使い方に違いがみられるかを明らかにした。この結果、修学旅行の小遣い 3 千円を約 6 割がほぼ使っていた。また児童の総合評価は 56.1% が 81 点以上と高評価であった。児童を「おうちの人からの一言」によって 3 つのグループに分類した結果、保護者から感想があるグループの児童の満足度は高くなり、日常、「おこづかいちょう」の教育的効果が高い児童は、修学旅行の「おこづかいちょう」でも自分なりの発見があり、教育的効果が高いことが分かった。

I. はじめに

我が国では、2025 年までにキャッシュレス決済比率を 4 割程度、将来的には 8 割を目指している。2020 年からの新型コロナウイルス感染症の影響もあり、日本のキャッシュレス決済比率は 29.7%(2020 年)まで上昇しており、子ども達の生活にもキャッシュレス化が浸透しつつある。このように、これまでの現金とは異なる「見えないお金」が普及する中、子ども達は、自分でお金を管理することができる能力、すなわち家計管理能力を学ぶ機会がこれまであまりなかった。

小学校における児童に対する金融経済教育は、物や金銭の大切さに気づき計画的な使い方を考えること、身近な物の選び方・買い方を考え適切に購入できるようにすることが指導事項として授業が進められてきた。平成 29 年告示の小学校家庭科の学習指導要領解説では、C 内容「消費生活・環境」において、「買物の仕組みや消費者の役割」が新設され、

より消費について理解が深まるように取り組むことが明記されている。物や金銭の大切さでは、家族のおかげで収入があること、収入に見合う支出が大切であることを学習している。また、内容間の連携学習を促しており、例えば調理実習や被服実習の材料の購入計画を立てたり、遠足・集団宿泊的行事などの学校行事と関連を図って学習したりすることなどが例示されているが、実際に学校の授業で十分に時間をとって指導することは難しく、家計管理能力を養う授業展開ができていないのが現状である。

そこで子どもが実際にお金に触れ、収支のバランスや、やりとりを肌で感じるができる小遣いを通して学習することで、お金の価値について理解することができるのではないかと考え、小遣いの収支の記録として「おこづかいちょう」を開発した。これまで、既存の子ども用の小遣い帳と家計簿アプリの分析を行い、それらを参考に、授業などを通して継続的に記入することができ、お金の価値を理解できる新たな「おこづかいちょう」を、小学生用に開発した(梶浦・小井戸・泉谷・大藪 2020)。そして継続的な「おこづかいちょう」の記入結果と、家庭教育の効果について、自己管理能力を含む子どもの非認知能力と保護者の意識にも焦点をあてて分析してきた(小井戸・泉谷・大藪 2020, 小井戸・大藪・奥田 2021)。

本研究では、継続的に「おこづかいちょう」の記入をしている児童に対して、学習指導要領にも記載されている、「学校行事」と結びつけることで、その効果を明らかにすることを目的としている。学校行事としては、児童が自分でお金を使える行事で最も金額が大きい修学旅行を対象とした。日常記入している「おこづかいちょう」と似た形式の修学旅行版の「おこづかいちょう」を作成し、これを用いた教育実践と、日常での「おこづかいちょう」の記入との関係やその教育的効果について分析した。

II. 方法

対象とした小学生は 6 年生の 2 クラス 57 人(28 人と 29 人)である。この児童は、2020 年 5 月から 11 ヶ月間の「おこづかいちょう」の記入実践に参加している児童で、修学旅行に行くまでの半年間、すでに「おこづかいちょう」を毎日記入している。修学旅行は 2020 年 11 月 13 日の 1 日であった。行先は通常は京都であるが、新型コロナウイルス感染症の影響から他府県の移動ではなく、県内移動となったことから岐阜県高山市で、日帰りであった。修学旅行に行く前と帰ってきてからの授業を、表 1 に示す題材指導計画に基づいて 4 時間分作成して実施した。作成した修学旅行版「おこづかいちょう」は、図 1~5 に示すように、これまで児童が継続的に毎日つけている「おこづかいちょう」(梶浦・小井戸・泉谷・大藪 2020)と似た形式とした。第 1 時は 11 月 2 日、第 2 時と第 3 時は 11 月 2 日と 9 日、11 月 13 日が修学旅行、第 4 時は 11 月 17 日に実施した。

題材指導計画では、第 1 時のねらいとして、修学旅行の買い物の目的や必要性を考える活動を通して、地域特有の物を購入できるだけでなく、お金を計画的に使う学習になることに気づき、本題材の願いをもち、学習計画を立てることができることとした。図 2 のワークシートを用いて、学習目標を「なぜ、修学旅行では買い物をする時間があるのだろうか？」と設定し、学習活動としては、①修学旅行の予定を確認する、②買い物の目的や必要性を交流する、③修学旅行でのお小遣いの使い方について、願いをもち、学習計画を立てる、とした。

第 2 時のねらいは、高山市の特産物について調べる活動を通して、値段や分量、品質、家族の願いなど様々な視点から情報を収集するとよいことに気づき、様々な視点から情報を整理できることである。学習目標を「高山市には、どんな特産物があるのか調べよう」と設定し、学習活動としては、①買い物の目的を確認する(図 2)、②高山市の特産物について調べる(図 3)、③調べた情報を様々な視点から整理する、④どんな視点から買い物計画を立てるのかを考え、次の時間の見通しをもつ、とした。

第 3 時のねらいは、修学旅行の買い物計画を立てる活動を通して、収集した情報を様々な視点から比較し、願いに合った物を選び、計画を立てることができることである。学習目標を「願いに合った買い物計画を立てよう」と設定し、学習活動としては、①どのような視点から選ぶとよいかを確認する、②自分の願いに合った買い物計画を立てる、③グループで交流し、計画を見直す、④計画に沿って、買い物をする店をはっきりさせ、地図を用いて買い物ルートの見通しをもつ、⑤買い物をする時の注意点を確認する、とした。これまでの 3 時間を終えてから、図 1～5 に示す「目指せ！買い物名人～修学旅行編～」と題した修学旅行版の「おこづかいちょう」を児童が作成し、つけ方を確認した。

修学旅行後、第 4 時を実施した。第 4 時のねらいは、修学旅行の買い物を振り返る活動を通して、購入した物の評価をすることで次の買い物での改善点が見つかることに気づき、よりよい買い物の仕方を考え、工夫しようとする事ができることとした。学習目標は「修学旅行の買い物を振り返り、評価をしよう」とした。学習活動は(図 5)、①修学旅行の感想を交流する、②レシートや家族の感想などをもとに、買い物について振り返り、交流する、③よかった点、改善点をまとめる、④家庭生活でのよりよい買い物の仕方を考える、とした。

本論文では、修学旅行版「おこづかいちょう」に記入された内容から、修学旅行で決められた小遣いを用いた金融経済教育効果について分析を行った。



図 1 修学旅行版「おこづかいちょう」表紙

買う予定の物	予定金額	誰に？ 何のために？	買った→○ 買わなかった→×(変更した物)	使ったお金	買ってどうだったか？
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
	円			円	1. おかった 2. よくなかった
合計	円			円	

修学旅行のまとめ

お小遣い

3,000円

使ったお金

円

残金

円

買ったらすぐに×モしよう。
写真も忘れずに！

ビン何本分だった？

本

3,000 円の内訳

500円
400円
300円
200円
100円

図 4 4 頁 修学旅行用「おこづかいちょう」

/ ←
🌐 ←

買う時にどんなことを考えましたか？

家族の感想

いつもの買い物と何が違いましたか？

総合評価！

よりよい買い物の仕方とは…

図 5 5 頁・第 4 時用ワークシート

表 1 題材指導計画（全 4 時間）

（1）評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
購入するために必要な情報の収集・整理を適切にして、修学旅行の買い物の計画を立てることができる。	修学旅行の買い物について、課題を設定し、購入に必要な情報を活用し、解決に向かって考えたり、工夫したりしている。	修学旅行の買い物について、課題の解決に向けて主体的に取り組んだり、改善したりして、生活を工夫し実践しようとしている。

（2）題材の流れ

時	虫めがね	ねらい	学習活動	評価規準
1	家族 家計	修学旅行の買い物の目的や必要性を考える活動を通して、地域特有の物を購入できるだけでなく、お金を計画的に使う学習になることに気づき、本題材の願いをもち、学習計画を立てることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1 修学旅行の予定を確認する。 なぜ、修学旅行では買い物をする時間があるのだろうか。 2 買い物の目的や必要性を交流する。 3 修学旅行でのお小遣いの使い方について、願いをもち、学習計画を立てる。 	修学旅行の買い物について課題を見出し、課題解決に向けて主体的に取り組もうとしている。 （主体的に学習に取り組む態度）
2	家族 家計	高山市の特産物について調べる活動を通して、値段や分量、品質、家族の願いなど様々な視点から情報を収集するとよいことに気づき、様々な視点から情報を整理することができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1 買い物の目的を確認する。 高山市には、どんな特産物があるのか調べよう。 2 高山市の特産物について調べる。 3 調べた情報を様々な視点から整理する。 4 どんな視点から買い物計画を立てるのかを考え、次の時間の見通しをもつ。 	願いに合った品質の良い物を選んで購入するために必要な情報の収集・整理が適切にできる。 （知識・技能）
3	家族 家計	修学旅行の買い物計画を立てる活動を通して、収集した情報を様々な視点から比較し、願いに合った物を選び、計画を立てることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1 どのような視点から選ぶとよいかを確認する。 願いに合った買い物計画を立てよう。 2 自分の願いに合った買い物計画を立てる。 3 グループで交流し、計画を見直す。 4 計画に沿って、買い物をする店をはっきりさせ、地図を用いて買い物ルートの見通しをもつ。 5 買い物をする時の注意点を確認する。 	収集した情報を様々な視点から比較し、願いに合った物を選び、計画を立てている。 （思考・判断・表現）
修 学 旅 行				
4	家族 家計	修学旅行の買い物を振り返る活動を通して、購入した物の評価をすることで次の買い物での改善点が見つかることに気づき、よりよい買い物の仕方を考え、工夫しようとすることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1 修学旅行の感想を交流する。 修学旅行の買い物を振り返り、評価をしよう。 2 レシートや家族の感想などをもとに、買い物について振り返り、交流する。 3 よかった点、改善点をまとめる。 4 家庭生活でのよりよい買い物の仕方を考える。 	よりよい買い物の仕方を考え、工夫しようとしている。 （思考・判断・表現）

Ⅲ. 結果

1. 修学旅行版「おこづかいちょう」の記入結果

学校で決められている修学旅行の小遣いは3,000円である。修学旅行版「おこづかいちょう」の普段の小遣いの金額を記入する欄では(図6)、もらっていないと回答した児童が最も多く(33.3%),次いで未記入(15.8%)であった。500円と回答した割合は12.3%であった。このことから、小遣いを普段はもらっていない児童が多く、小遣いをもらっているとしても500,600円程度であることが分かる。修学旅行では1日で3,000円の小遣いが与えられるため、児童たちにとっては普段扱うことのない大きな金額を自分の意志で使う貴重な機会であることが分かる。

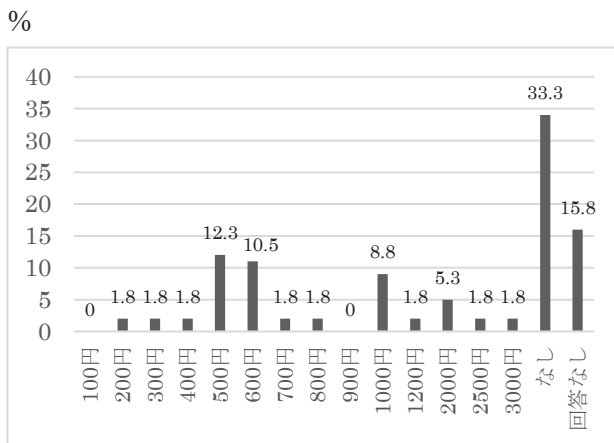


図6 普段の小遣いの金額

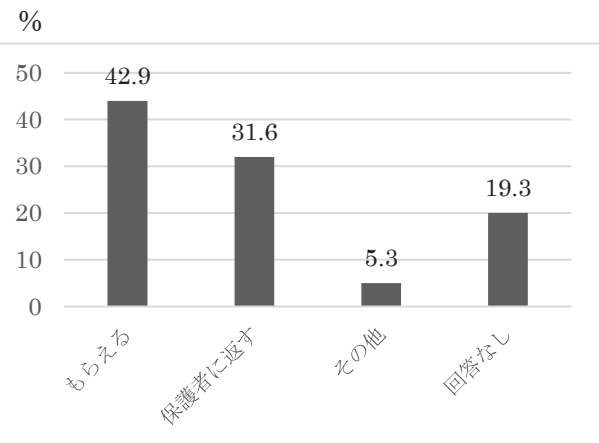


図7 余った小遣いの用途

次に修学旅行での3,000円の小遣いのうち、使わなかったお金をどうするかを記入する欄では(図7)、「もらえる」と回答した児童が最も多かった(42.9%)。続いて31.6%の児童が「親に返す」と回答し、2番目に大きな割合を占めた。

修学旅行で使ったお金の合計を記入する欄では、図8より2,501~3,000円の割合が最も多く57.9%を占めた。このことから、半分以上の児童が上限である3,000円に近い金額を使ったことが分かる。未記入の児童の割合は約12%あった。これらの結果から、修学旅行において3,000円の小遣いをもらうと、3,000円に近い金額で買い物しようとする児童が多いことが分かった。

修学旅行で使った金額と、余ったお金を保護者に返す児童、もらえる児童との関係性を分析した。この結果、余ったお金を保護者に返すと回答したグループ、もらえると回答したグループ、両者とも、使った金額2,500~3,000円が最も多かった。余ったお金を保護者に返すと回答したグループ18人のうち11人(約61%)が2,500~3,000円と回答し、余ったお金をもらえると回答したグループ25人のうち17人(68%)が2,500~3,000円と回答した。使った金額を2,001~2,500円と回答した児童が、保護者に返すと回答したグループで3人(約17%)、もらえると回答したグループで4人(16%)となり、使った金額を1,501~2,000円と回答した児童が、保護者に返すと回答したグループでは3人(約17%)、もらえると回答したグループで3人(約12%)となった。これらのことから、余ったお金がもらえるからといって修学旅行でお金をたくさん余らせたり、保護者に返すからといってもらった金額を修学旅行で使い切る傾向はないことが分かった。

%

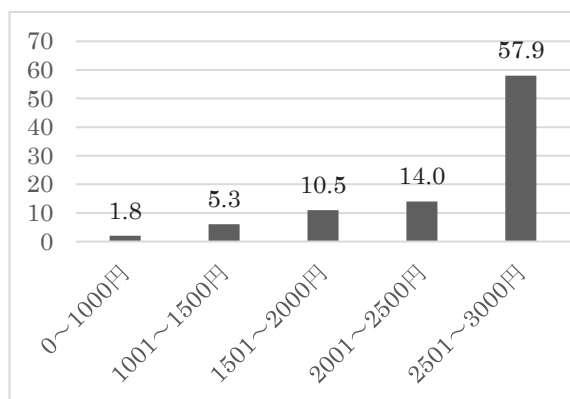


図 8 修学旅行で使った金額

%

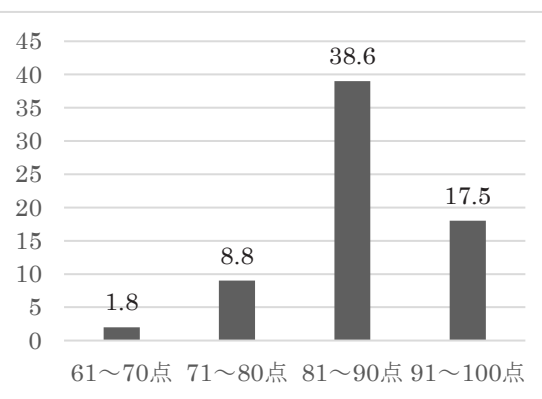


図 9 総合評価

2. 修学旅行後の分析

修学旅行後、第4時として図5に示すワークシートを用いて、修学旅行の振り返りをした。「買う時にどんなことを考えましたか」という自由記述と総合評価に着目すると、総合評価は図9に示すように、81~90点が38.6%、100点が17.8%（未記入は約34%）と、自分のお金の使い方を高く評価した児童が多かった。

自分のお金の使い方を高く評価した児童の自由記述内容に着目すると、「願いであったいろいろな人に感謝を伝える買い物ができる。買い物のむずかしさを知れた。思い出づくりのものも買えた。」「残りの金額を見て買うものを決めることができた。でも予定のものじゃないものが欲しくなってそれを買ってしまったから、次からは予定のもの欲しくなったものを区別して考えていきたい。」「目的に合わせて、人物や場面を思い浮かべて考えられた。実際に喜んでもらえたり、調べ学習の店の情報を活かしてできた。消費、賞味をあまり見ていなかった。日持ちするものだったから運がよかったけど、(すぐ食べちゃったし)もっと気を付けなければならない。」など、反省する点はあるつつ、いい学習ができたと感じていたり、自分なりの目標を達成できていたり、家族が喜んでくれたことによって自分のお金の使い方をよかったと感じたりしているということが分かった。

一方、自分のお金の使い方を比較的低く評価した児童の自由記述内容に着目すると、「かなりお金が余った。高山限定だから「さるぼぼ」をもう一個買えばよかった(欲しかった)。」や、「使った金額より残った金額のほうが多かった。お札や小銭の使い方に気を付けたい。」など、計画通りにお金を使えなかったり、欲しいものが買えなかったり、他の児童に比べて残ったお金が多いことを記述していた。

「いつもの買い物と何が違いましたか」(図5)の記入欄では、「いつもはゆっくり選んでしっかり考えることができるけど、時間が限られているから急いでしっかり考えられない。」や、「いつもはお母さんがお金の管理をして自分の好きなものが買えたけど、自分だけだと値段と消費期限をよく見るようになった。いつもは捨ててしまうレシートでもすごく細かく情報が載っていることが分かった。」「いつもはお金が足りなくなっても、お母さんに借りればいけど、今回は足りなくなると困るから、お金の計算を自分でやるのが違った。」など時間やお金に制約があるという内容や、「いつもは自分のことしか考えていなかったけど、今回は家族などの自分以外の人のことを考えて買った。」「いつもは思いつきや、す

ぐ必要と思ったらすぐ買ってしまっていたけど、修学旅行では、しっかり誰に、何のためにということを考えて使えた。」など、自分のことだけではなく、おみやげとして誰かのために買い物をするという内容の記述が多く見られた。

修学旅行終了後に保護者に記載してもらった「家族の感想」(図 5)では、「前もって調べておいたおみやげを実際にみて値段を確かめて購入することができてよかった。」や、「いいお金の使い方ができたね。これからの日常でもお金の使い方を考えていこう。」など、お金の使い方を褒めたり、今後のお金の使い方を提案したりする内容や、「漬物は、カットしてあってすぐに食べられて美味しかったよ。買ってきてくれてありがとう。みんなが食べられるお菓子もいっぱいありがとう。お姉ちゃんへのおみやげも、自分の我慢して買ってきてくれてありがとう。喜んでいたよ。」や、「大好きな『しらさぎ物語』のお菓子を買ってきてくれてありがとう。姉が好きそうなおみやげを事前にリサーチして買ってきてくれたのも嬉しかったです。姉も嬉しかっただろうと思います。」など、おみやげに対する感謝や褒める内容が多く見受けられた。この記述内容から、家族の好きな物や欲しいおみやげを事前にリサーチしている児童や、自分の欲しいものより家族のために小遣いを使った児童がいるということが分かる。また「タブレットを使ってどのおみやげにするか値段を調べたり、地図を見てお店同士の距離を調べたりして、とてもいい勉強になったと思います。おみやげも喜んでもらえてうれしそうでした。服装も勉強が活かされていて良かったです。」という記述も見受けられ、家庭科の被服の学習が活かした児童がいることが分かった。修学旅行先の名物などを購入した児童が多く、その地域ならではのものにこだわってお金を使った児童が多かった。

3. 毎日の「おこづかいちょう」の継続記入との関係

以上、修学旅行でのおこづかいの使い方について明らかにしてきたが、本節では、継続的記入をしている「おこづかいちょう」の状況と、修学旅行時のお金の使い方に関係があるかを分析した。

毎日記入する「おこづかいちょう」には、「おうちの人から一言」欄がある。これまでの「おこづかいちょう」の記入結果では、児童は「おうちの人からの一言」で感謝や褒められたりすると、嬉しくて継続意欲が高まる傾向が見られた(小井戸・泉谷・大藪 2020)。本節ではこの点に注目して、「おうちの人からの一言」の形態を 3 つに分類した。第一は「おこづかいちょう」において、ほとんどの週、月で「おうちの人からの一言」欄に記述があったグループ(グループ 1)、第二に記述があった週、月がいくつか存在するグループ(グループ 2)、第三は期間を通してすべての週、月で「おうちの人からの一言」欄に記述がなかったグループ(グループ 3)である。それらのグループから代表的な児童を 2 人抽出し、修学旅行でのお金の使い方を分析した。抽出した児童は、グループ 1 は児童 a と b、グループ 2 は児童 c と d、グループ 3 は児童 e と f である。

(1) グループ 1 の児童の傾向

児童 a は、ほとんどの週、月で「おうちの人からの一言」欄に記述がある児童である。修学旅行版「おこづかいちょう」での保護者の感想を記入する欄には、お金の使い方やおみやげの感想、感謝の内容を以下のように記入していた。「よく考えてとってもいい買い物

をしたね。自分のものだけでなくみんなにおみやげまでありがとう。美味しく頂きました。思い出に残る、手元に残るおみやげは、これからも修学旅行の思い出を思い出させてくれるね。ハンカチ、香り袋よかったね」。児童 a は、普段は小遣いをもらっておらず、修学旅行で使った金額は 2,470 円だった。余ったお金はもらえると回答している。児童 a 自身の総合評価は 95 点であり、「目的に合わせて、人物や場面を思い浮かべて考えられた。実際に喜んでもらえたし、調べ学習の店の情報を活かしてできた。消費、賞味をあまり見ていなかった。日持ちするものだったから運がよかったけど、(すぐ食べちゃったし) もっと気を付けなければならない。」と自分のお金の使い方を振り返っている。これらのことから、保護者、児童、共に修学旅行でのお金の使い方を高く評価しており、保護者がおみやげに喜びを示したことで、児童自身がお金の使い方をよかったと感じているということが分かる。また、調べ学習を活かした点、修学旅行での買い物を通して、消費、賞味期限を見なければならぬという買い物において大切な観点に気づいていることが分かる。

児童 b は、「おこづかいちょう」の記入を開始してから小遣いをもらうようになった児童である。修学旅行版「おこづかいちょう」での「家族の感想」欄には、「家族の人も欲しいものがあって嬉しかった。お金の使い方もよかったね。」との記入が見受けられた。普段は 600 円の小遣いをもらっており、修学旅行で使った金額は 2,020 円だった。余ったお金は保護者に返すと回答している。児童 b 自身の総合評価は 90 点で、「残りの金額を見て買うものを決めることができた。でも予定のものじゃないものが欲しくなってそれを買ってしまったから、次からは予定のものと欲しくなったものを区別して考えていきたい。」と自分のお金の使い方を高く評価しつつ、反省点と今後の行動について述べている。また、いつもの買い物との違いを記入する欄では、「いつもはお母さんがお金の管理をして自分の好きなものが買えたけど、自分だけだと値段と消費期限をよく見るようになった。いつもは捨ててしまうレシートでもすごく細かく情報が載っていることが分かった。」と記述しており、レシートを見ることで新しい発見が得られたということや、値段や消費期限を気にかけて買い物することが出来たということが分かる。

児童 a, b の状況から、グループ 1 では、通常から「おうちの人からの一言」があり、修学旅行版「おこづかいちょう」でも「家族の感想」欄に丁寧な記述が見受けられ、児童自身、自分のお金の使い方を高く評価し、新しい学びを得ていた。これらのことから、グループ 1 では、修学旅行という児童自身で大きな金額を扱う機会を活用できていることが分かった。

(2) グループ 2 の児童の傾向

グループ 2 は、毎日の「おこづかいちょう」の「おうちの人からの一言」欄への記述がグループ 1 ほどではないが、ある程度あったグループである。児童 c は、5 月から 9 月までは、「おうちの人からの一言」欄に記述があったが、10 月以降記述がなくなってしまった。11 月の修学旅行版「おこづかいちょう」では、「家族の感想」欄に「おいしそう。豆板好きだから本当にありがとう。」と簡単ではあったがコメントがあった。この児童は普段は小遣いをもらっておらず、修学旅行で使った金額は 1,850 円だった。余ったお金は保護者に返すと回答している。児童 c の総合評価は 60 点で、「かなりお金が余った。高山限定だから『さるぼぼ』をもう一個買えばよかった(欲しかった)。」と自分のお金の使い方を比

較的低く評価している。

児童 d は、児童 c と同様、5月から9月までは「おうちの人からの一言」欄に記述や保護者のサインがあったが、10月以降は記述がなかった児童である。修学旅行版「おこづかいちょう」での「家族の感想」欄に「さわらびがもちもちしていて手作り感があって美味しかった。硬い食感チョコが美味しかった。」というおみやげに対する感想の内容の記述があった。この児童は普段は小遣いをもらっておらず、修学旅行で使った金額は2,000円だった。余ったお金は保護者に返すと回答している。児童 d は総合評価欄への記述はなく、いつもの買い物との違いについては、「お母さんがいなかったのだから、買っていいのか、計画的に কিনかなかったり、喜ぶのかを考えることができる（心配）。」と記述していた。

グループ 2 では、修学旅行版「おこづかいちょう」の「家族の感想」欄に記述はあったが簡単な内容であった。児童も自分のお金の使い方を振り返り、後悔や不安を述べているものが多いが、それ以上深める内容や今後の行動に対する事柄ではなかった。

(3)グループ 3 の児童の傾向

グループ 3 は、毎日の「おこづかいちょう」の「おうちの人からの一言」欄に全く記述がなかったグループである。児童 e はすべての週、月で「おうちの人からの一言」欄に記述がなかった。修学旅行版「おこづかいちょう」での「家族の感想」欄には、「すごくありがたい。センスいいね。」と簡単ではあるが記述があった。この児童は普段は小遣いをもらっておらず、修学旅行で使った金額は2,520円だった。余ったお金は保護者に返すと回答している。児童の総合評価は80点となっており、「思い出に残るものをしっかり買えた。」と自分のお金の使い方を振り返っている。いつもの買い物との違いを記入する欄では、「いつもは全く計画していなかったけど、よく計画してやれた。」と記述しており、計画性をもってお金を使えたことを評価している。このグループの保護者は、日常記入している「おこづかいちょう」ではコメントはないが、修学旅行というイベント時には短い記述があった。また児童は日常と非日常でのお金の使い分けを「計画」という視点から考えることができていた。

児童 f についても同様に、すべての週、月で「おうちの人からの一言」欄に記述がなかった児童である。修学旅行版「おこづかいちょう」での「家族の感想」欄に、「いいチョイスだ。おいしそう。早く食べたい。しっかりと買い物できたね。」との記述があった。この児童は普段は小遣いをもらっておらず、修学旅行で使った金額は2,100円だった。余ったお金はもらえると回答している。児童の総合評価は79点となっており、「買い物や振り返りはよかったけど、下調べがうまく出来ていなかった。」と振り返っている。いつもの買い物との違いを記入する欄では、「自分でどれがいいか考えて買い物するのがいつもと違った。」と記述している。

児童 e, f の分析から、グループ 3 は、普段の「おこづかいちょう」には保護者からのコメントはないが、修学旅行版「おこづかいちょう」では「家族の感想」があった家庭が多かった。どれも短く、具体的なものではないが、それでも児童は家族のことを思って買ったものに対するコメントは嬉しいはずである。児童は、今後に生かす内容にまでの言及はなかったが、自分のお金の使い方を振り返ることや、自分で考えなければならないことには気づくことができていた。

(4)まとめ

グループの分析から、グループ1のように、保護者、児童、共にお金の使い方や選び方について細かく振り返っている家庭では、修学旅行という非日常の場面で、児童が一人になにを買うか決め、実際に臨機応変に買い物を行うという経験を通して、金融経済の教育的効果や新しい発見が得られることが多かった。特別の行事での買い物の仕方から、今後の買い物の仕方に言及する内容が見られた。一方、グループ2,3では、普段の「おこづかいちょう」に比べて、修学旅行版「おこづかいちょう」では、「家族の感想」が見られたが、両グループとも修学旅行ならではの発見や学びについて具体的に言及している記述はあまり見られなかった。児童も振り返りはできているが、次の行動につなげて考える内容にはなっていなかった。しかし、通常は家族のコメントがない場合も、修学旅行のようなイベントでコメントがあつたことは、児童にとっては嬉しいと感じるはずなので、家庭との協力方法を模索する必要がある。グループごとに修学旅行で使った金額や普段の小遣いの有無、余ったお金を返すのかもらえるのかについての傾向は見られなかった。

IV. まとめ

本論文では、小学6年生57人に対して、修学旅行での買い物と「おこづかいちょう」の記入という4時間分の授業案を作成し実施し、修学旅行での買い物行動を分析した。また対象となった児童は同時期に継続的に毎日「おこづかいちょう」を記入していることから、「おこづかいちょう」の中の「おうちの人からの一言」の欄に注目し、保護者からのコメントの有無や量によって児童のグループを3つに分け、修学旅行時のお金の使い方と関係があるかを分析した。

この結果、小遣いをもらっていない児童が3割いたが、1ヵ月500円と600円が多かったことから、修学旅行時の1日で3,000円という小遣いは、児童にとっては大金であることが分かる。余ったお金は42.9%がもらえる、31.6%が返すと答えているが、もらえるから使わない、返すから使う、という傾向は見られなかった。実際に修学旅行で使ったお金は約6割が予算いっぱい使っていた。修学旅行時のお金の使い方を含めた総合評価は81点以上が5割以上となっており、自己評価は高かった。特に評価が高い児童は、現状を冷静に評価し、これまでの学習を活かしたと感じていた。一方、評価が低い児童は、計画通りお金を使えていないと感じていたが、両者とも修学旅行などの非日常のイベントで、自分のことだけでなく、家族のことを考えることができたり、計画の重要性や表示まで考えることができたりしていた。また保護者も家庭科の勉強が服装に活かされていると感じるなど、普段の学習を実生活に応用できていることに気づいていた。毎日の「おこづかいちょう」記入で「おうちの人からの一言」の頻度によって児童をグループ分類した結果、保護者の関心が高い児童は、修学旅行でも自分なりの学習や発見を得ていた。一方、保護者の関心が低い場合も、修学旅行などのイベント時には関心を寄せており、それによって児童も買い方を客観的に見ることでできていることが分かった。

本論文では、毎日の「おこづかいちょう」の記入を継続させながら、児童が自分で意思決定をし、児童にとっては高額の1日で上限3,000円の買い物をする機会となる修学旅行という学校行事をとりあげ、修学旅行版の「おこづかいちょう」を作成し、修学旅行の前

後に授業をすることで、金融経済教育を実践した。修学旅行に行く前に、事前に何を購入するかを考え、調べる活動や、修学旅行で自分一人での買い物の決定、そして修学旅行が終了してからの振り返りを丁寧にする中で、お金の使い方だけでなく、家族のことまで考えることができていることが分かった。また修学旅行でのお金の使い方について、保護者から喜びや感謝、感想が示されることで、児童は自分なりの発見や反省、振り返りの具体性を考えることができていた。日々の「おこづかいちょう」によって得られることも多いが、このようなイベントにおけるお金の使い方を丁寧に学ぶ時間は児童にとって極めて重要である。今後も子どもの金融経済教育を学校教育と家庭で連携して実施することで、金融経済の教育効果を高めていきたい。

参考文献

- 大藪千穂・杉原利治(2008),「人間発達プロセスを基盤とした『人生設計ゲーム』開発の試み」,『消費者教育』,第28号,pp.95-105
- 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 家庭編」,平成29年7月(経済産業省,
https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/cashless_payment/pdf/2021_001_04_00.pdf)
- 梶浦玲奈・小井戸あや乃・泉谷徹・大藪千穂(2020)「子どもための『おこづかいちょう』の開発」『中部消費者教育論集』第16号, pp.39-52
- 小井戸あや乃・泉谷徹・大藪千穂(2020)「小学生を対象とした『おこづかいちょう』を用いた消費者教育」『中部消費者教育論集』第16号, pp.53-63
- 小井戸あや乃・大藪千穂・奥田真之(2021)「『おこづかいちょう』を用いた小学生に対する金融経済教育」『生活経済学研究』第53巻, pp.1-14
- キャスリーン・デューイ, ロン・ベリー著, 西村隆男訳(2004)『子どものおこづかい練習帳—おこづかいをもらおう』, 主婦の友社
- 金融経済教育推進会議(2014)「金融リテラシー・マップ『最低限身に付けるべき金融リテラシー(お金の知識・判断力)』の項目別・年齢層別スタンダード」
- 金融広報中央委員会(2015)「子どものお金と暮らしに関する調査第三回」
https://www.shiruporuto.jp/public/data/survey/kodomo_chosa/2015/(2020年3月6日参照)
- 消費者庁(2013)「消費者教育の体系イメージマップ」, 消費者教育推進のための体系的プログラム研究会, <https://www.kportal.caa.go.jp/search/pdf/imagemap.pdf>(2021年9月25日参照)
- 田結庄順子・柳昌子・吉原崇恵・中屋紀子・牧野カツコ(1992)「児童・生徒・大学生の消費実態と学校における消費者教育の今後の課題に関する研究(第1報)—研究枠組と基本的属性および児童・生徒の場合」『日本家政学会誌』第43巻8号, pp.813-825
- 鶴藺佳菜子・山口泰史・鈴木翔・武田真梨子・須藤康介(2012)「家庭の教育戦略としてのおこづかい—全国小中学生データの計量分析—」東京大学大学院教育学研究科紀要, 第52巻, pp.157-167

中室牧子(2015)『「学力」の経済学』, 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン
松川誠一・関口陽介・秋山和子(2018)「小学6年生の金融自己効力感とそれを規定する諸
要因」『経済社会学会年報』第40巻, pp.141-155
碧ひろ子著, 西村隆男監修(2014)『子どもにおこづかいをあげよう! -わが子がお金に困
らないためのマネー教育を!』, 主婦の友社
文部科学省(2016), 「生きる力」, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/_icsFiles/afieldfile/2011/07/26/1234786_1.pdf(2020年1月21日参照)
文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編」, P69-70
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_009.pdf (2020年1月21日参照)
文部科学省(2017)新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そ
して実施へー
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf(2020年1月21日参照)
山本登志哉(1992)「小学生とお小遣いー『お金』・『物霊』・『僕のもの』」『発達』51号, pp.68-76